

日本点字図書館と出版社との協働

A way of publishers' donating a selection of books to the Japan
Blind Library 1948-1954

NISHIWAKI, Tomoko

西 脇 智 子

日本語コミュニケーション学科准教授

抄録：

本研究は、戦後昭和23年4月1日に改称し再出発した日本点字図書館の創設者である本間の窮地を救った岩波書店と岩波書店の呼びかけによる出版社との協働の実態を明らかにした。日本点字図書館所蔵の保存資料「保存箱 No. 4：墨字原本寄贈」を調査した結果、点訳用選定委員会が選定した選書合計565冊の照会は、全9回にわたり、全国出版協会及び日本出版協会関係の合計109社に届けられていたことが判明した。

Abstract：

This paper reported the publishers' approval for an Iwanami plan in the Japan Blind Library 1948-1954. An investigation revealed several possibilities. One of these possibilities was that 109 publishers could donate a selection of 565 books to the library.

キーワード：日本点字図書館、本間一夫、岩波書店、小林勇、出版社、選書、寄贈方法

Keywords：Japan Braille Library, Honma Kazuo, Publishing, Kobayashi Isamu, The publishers, Selection of books, A way of donation

はじめに

今日に至る視覚障害者の読書生活を支えてきたのは点字図書館である。点字図書館の出版には多額の経費を要し、商業ベースに乗りにくいという事情もあって、多種類の読み物の点字出版を望むことはほとんど不可能に近い状況にある。そこで活躍しているのが点字図書館であり、今日失明者の読書生活を支えているのが点字図書館だと言っても決して過言ではない。そこに点字図書

館の大きい存在意義も存するのである(阿佐 2012:150)。昭和15(1940)年11月10日に本間一夫(以下、本間)が創設した「日本盲人図書館」は民間の点字図書館である。終戦後の昭和23(1948)年に疎開先の北海道増毛から帰京した本間は、同年4月1日をもって「日本点字図書館」と改称し、諏訪町(現在の高田馬場)の焼け跡に完成した木造15坪の建物で事業を再出発させるに至る。法人格の取得とともに焼失した図書館の建物を再建することが目下の大事業となっていた。

法人格を持たない任意団体では、将来の事業発展がおぼつかないことに気付いた本間は、私有地の土地の半分、約120坪を基本財産として寄付することにして、法人の申請に取り掛かった。創立理事には、当時国立国会図書館長であった金森徳次郎を迎え、柏木教会牧師でYWCA会長の上村環、リーダーズ・ダイジェスト日本支社長の鈴木文史朗、内輪から加藤善徳、佐藤和興の名を連ねた。理事長に金森、本間は常務理事として、財団法人の許可を得たのは昭和25(1950)年10月9日のことである。しかし、法人化はしたものの経済的苦境は一向に改善されず、困難は日ごとに加圧される状況であった。昭和27(1952)年5月7日には「社会福祉法人日本点字図書館」に組織変更している。昭和27年当時の日本点字図書館はどん底の状態に置かれていた。本間が自著で述懐するほどの人生の中でもっとも苦しい時期にあった(本間 1980:88~91)。

谷合は日本点字図書館のどん底の理由をあげている。第一は、建物の狭さにあった。日本点字図書館は点訳奉仕運動によって、蔵書数は着実に増加を続けていた^{注1}。しかし、その点字本を収納するスペースはすでに飽和状態であった。新館を建てる余裕などなく、二年後・三年後はいったいどうなるのか、先の見通しがまったく立たなかったのである。第二は、財政的な行き詰まりであった。昭和26(1951)年3月には社会福祉事業法が制定、点字図書館は第二種社会福祉事業と規定されたこともあり、国からの補助金は一円もなかった^{注2}。本間個人の蓄えは、すでに底をついていたこの時に、起死回生の2つの出来事が起こる。1つは、昭和27年の春、当時、岩波書店専務の小林勇が訪問し、そして岩波書店が点訳に必要な図書はすべて無料で提供してくれるという申し出があった。しかも、岩波の呼びかけで、文藝春秋・新潮社・中央公論社・講談社など無料提供に賛同してくれたのであった。2つ目は、昭和27年11月、朝日新聞社から「朝日社会奉仕賞」が贈られるという知らせがあったことである。このことは、翌年の1月3日、朝日新聞に大きく報道され、点字図書館事業が広く世に紹介されたのであった。この受賞は、二年後の厚生省からの委託事業へと結びつき、国からの補助金の道を開くことになる(谷合 1998:80-81)。

本稿は、谷合が指摘するこの起死回生の1つ目の出来事、点訳に不可欠な活字本の入手方法、すなわち、岩波書店をはじめとする出版社の協力により具現した図書提供の方法に焦点をあてている。そこで、①岩波書店小林専務の訪問後に届いた「岩波書店からの寄贈書」とはどのようなものだったのか、②岩波書店の呼びかけによる出版社の協力とはどのようなものだったのか、その詳細を把握するため、今般、館内で発見された日本点字図書館所蔵の保存資料「保存箱No.4:墨字原本寄贈」に着目し調査研究を実施し、これまで「岩波書店、文藝春秋社、新潮

社、中央公論社、講談社等」の「等」一文字で表されてきた「出版社」とはなにかを明らかにし、本間の窮地を救った出版社との協働の実態を探ることが本研究の目的である。

1. 岩波書店からの寄贈書

日本点字図書館の苦しい時期にあって一つの大きな喜びがもたらされる。それは、昭和27年4月下旬、岩波書店専務の小林勇が秘書の浅見いく子とカメラマンの長野重一を伴って、突然、本間を訪ねて来たことに始まる。当時の建物の外観（図表1）と自宅を兼ねていた日本点字図書館の内部の様子が写真に残されている（図表2）。



図表1 昭和23年の日本点字図書館の外観
(写真：日本点字図書館所蔵)



図表2 昭和25年当時の日本点字図書館
(写真：日本点字図書館所蔵)

「岩波書店」との事業の縁が結ばれた最初の日について、本間は自著『指と耳で読む』に述懐している（本間1980：93）。

狭いようやくすり抜けられるような仕事場を見ていただいてから、二階の部屋でお話を伺いました。

「今回『図書』が、読者投稿を求めたところ、加藤善徳氏から「点字本のなげき：点字本も図書である」という投稿が参り、初めてお宅の存在を知りました。そこで2月号に、厚生省の松本更生課長の原稿をいただき、今日は実際に拝見にあがったのです。お仕事のことはいくわかりました。これから点訳のために必要な岩波書店の図書は、無条件で提供しましょう」と言われるのです。さらに岩波書店から日本出版協会や全国出版協会を通して他の出版社にも呼びかけ、同じ協力をしてもらおうと、おっしゃるのです。思いもかけぬ事であり、一冊の活字書を買うにもままならぬ時だっただけに、このことは本当にありがたく、岩波書店、文藝春秋社、新潮社、中央公論社、講談社等、その冊数の増減はありますが、30年後の今日まで、ずっとそのご協力をいただいております。またこれが、岩波書店とこの事業とのご縁が結ばれた最初の日でもありました。

岩波書店との縁の結ばれた最初の日をもって、寄贈書は実際に本間の手元に届くようになる。本間は、この経緯を点訳者に宛てて一報している。「多年の懸案であった点訳書選定委員会をいよいよ近く設置できる運びとなった」と、昭和27年7月発行の「点訳通信23報」に報じた記事に明記されていたことが判明した。

この事がこの様に急速に具体化したのは全く岩波書店の絶大な御好意御協力に依るものなのであります。岩波書店発行の「図書」2月号に厚生省の松本更生課長が点字図書の問題について書かれた事は本紙21報にもふれましたが、それ以来岩波の本事業に対する関心は非常に深まり、先頃専務小林勇氏が直接来館視察されて、今後点訳の為に用いるなら同書店発行の本は何なりと寄贈しようという確約を下され既に第1回分として29冊を御寄贈下さいました。そして更に今後適当な機関を通して、この事を他の有力な出版社にも呼びかけようとの御熱意をまで示されたのであります。点訳書選定委員会の事は、本館の誕生後1、2年にして考えられ乍ら、活字書購入の経済的裏付けを持たぬまま実現を見なかったのですが今日、このよろこびの時は、岩波書店によってもたらされたと云っても決して過言ではありません。数々の良書を発行普及して我国の一般文化に偉大な貢献をして来た同書店が忘れられて居た盲人読書の面にも率先奉仕の先鞭をつけられたわけであります。誠に感謝に耐えません。

岩波書店からの寄贈書は、「点訳通信23報」に第1回分（新書10冊、文庫14冊、現代叢書1冊、少年文庫4冊、計29冊）、「点訳通信26報」に第2回分（少国民のために3冊、全集1冊、新書3冊、文庫15冊、現代叢書1冊、少年文庫7冊、計30冊）が掲載されていた。本間は、点訳者に岩波書店よりの寄贈書を紹介し、点訳希望の申越しを依頼していたのである。

そこで、筆者は「点訳通信」の掲載記事から得られた情報を『岩波書店70年』と照合し、発行年を補足して作表を試みた。岩波書店専務の小林の有言実行により日本点字図書館に届いた「第1回分」（図表3）及び「第2回分」（図表4）の寄贈書一覧を示す。

図表3 岩波書店からの「第1回分」寄贈書一覧

書名	著者名	発行年	備考
音楽美入門	山根銀二	昭和25年	新書
三民主義と現代中国	岩村三千夫	昭和24年	
ミケルアンジェロ	羽仁五郎	昭和14年	
禪と日本文化	鈴木大拙／北川桃雄 訳	昭和15年	
続 禪と日本文化	鈴木大拙／北川桃雄 訳	昭和17年	
ミレーとコロー	内田 巖	昭和25年	
ジャンヌ・ダルク	ジョセフ・カルメット 川俣晃目 訳	昭和26年	

書名	著者名	発行年	備考	
川釣り	井伏鱒二	昭和27年	新書	
蒙古の旅 上巻	ハズルンド／内藤岩雄 訳	昭和17年		
蒙古の旅 下巻	ハズルンド／内藤岩雄 訳	昭和17年		
近代国家に於ける自由	ラスキ／飯坂良明 訳	昭和26年	現代叢書	
共産党宣言	マルクス、エンゲルス 大内兵衛・向坂逸郎 訳	昭和26年	文庫	
その前夜	ツルゲーネフ／湯浅芳子 訳	昭和26年		
さすらひのオランダ人・タンホイザー	ワアグナア／高木 卓 訳	昭和26年		
旅は驢馬をつれて	ステイヴンソン／吉田健一 訳	昭和26年		
恋ぶみ濫用	ケラー／関 泰祐 訳	昭和26年		
守銭奴	モリエール／鈴木力衛 訳	昭和26年		
ドン・ジュアン	モリエール／鈴木力衛 訳	昭和27年		
或る少女の死まで	室生犀星	昭和27年		
魔風恋風 前篇	小杉天外	昭和26年		
魔風恋風 後篇	小杉天外	昭和26年		
項羽と劉邦	長与善郎	昭和26年		
今戸心中	広津柳浪	昭和26年		
ロビンフッドの愉快的冒険	H・バイル／村山知義 訳	昭和26年		
続 ロビンフッドの愉快的冒険	H・バイル／村山知義 訳	昭和26年		
名犬ラッド	ターヒューン／岩田欣三 訳	昭和26年		少年文庫
クルミわりとネズミの王様	ホフマン／国松孝二 訳	昭和26年		
ドン・キホーテ	セルバンテス／永田寛定 訳	昭和26年		
りこうすぎた王子	A・ラング／光吉夏弥 訳	昭和26年		

出典：本間一夫編（1952）『点訳通信 23 報』日本点字図書館及び、緑川亨編（1988）『岩波書店 70 年』岩波書店と照合し、筆者が作表した。

図表 4 岩波書店からの「第 2 回分」寄贈書一覧

書名	著者名	刊行年	備考
日本人の祖先	長谷部言人	昭和26年	少国民のために
蚊のいない国	細井輝彦	昭和27年	
私たちの太陽	関口鯉吉	昭和27年	
砂漠と闘う人々	リッチ・コールドー／甲斐静馬 訳	昭和27年	新書
引力	季広田／岡崎俊夫 訳	昭和27年	
平和の証言	杉捷夫	昭和27年	全書
古代ギリシャ文学史	高津繁春	昭和27年	

書名	著者名	刊行年	備考
人間の歴史の物語 下	ヴァン・ローン／日高六郎・日高八郎 共訳	昭和27年	少年文庫
ガリヴァー旅行記	スウィフト／中野好夫 訳	昭和26年	
続 ガリヴァー旅行記	スウィフト／中野好夫 訳	昭和26年	
レスター先生の学校	ラム／西川正身 訳	昭和27年	
世界をまわろう 上	V.M. ヒルター／光吉夏弥 訳	昭和27年	
世界をまわろう 下	V.M. ヒルター／光吉夏弥 訳	昭和27年	
水の子	キングスレイ／阿部知二 訳	昭和27年	
デマの心理学	オルポート、ポストマン／南 博 訳	昭和27年	現代叢書
今昔物語集 (1)	丸山次郎 校訂	昭和27年	文庫
古今和歌集	尾上八郎 校訂	昭和2年	
新古今和歌集	佐々木信綱 校訂	昭和4年	
国性爺合戦	近松門左衛門	昭和2年	
七人の風来坊	ホーソン／福原麟太郎 訳	昭和27年	
東洋の幻影	ピエール・ロティ／佐藤輝夫 訳	昭和27年	
かもめ	チェーホフ／湯浅芳子 訳	昭和27年	
マリー・アントワネット 上	シュテファン・ツワイク／高橋貞二・秋山英夫 訳	昭和27年	
自殺について	ショウペンハウエル／斎藤信治 訳	昭和27年	
黒髪 他	近松秋江	昭和27年	
同志の人々	山本有三	昭和27年	
役の行者	坪内逍遙	昭和27年	
恩讐の彼方に 忠直卿行状記	菊池寛	昭和27年	
木下杢太郎詩集	河盛好蔵 選	昭和27年	
機械	横光利一	昭和27年	

出典：本間一夫 編 (1953)『点訳通信 26 報』日本点字図書館及び、緑川亨編 (1988)『岩波書店 70 年』岩波書店と照合し、筆者が作表した。

本間は「点訳通信 23 報の巻頭に岩波書店からの点訳用活字書の寄贈をビッグニュースとして報じたが、同じ協力を他のあらゆる出版社からもいただけることとなった」、と昭和 28 年 1 月発行の『点訳通信 26 報』で報じている。「日本出版協会と全国出版協会の首脳部の方々が特別にご理解とご熱意をもって所属各出版社に対して点訳奉仕運動の意義を説き、点訳用活字書の寄贈方を依頼して下さった結果」である。この事は、点訳書選定委員会の発足に優るとも劣らぬ「盲人文化史上の一大福音」である、と感謝の意を表した (本間 1953)。

調査の結果、「点訳通信 26 報」には、日本点字図書館と出版社の協働に関連する記事の見出し

が5件（①点訳書選定委員会の発足、②各出版社の御協力、③点訳書選定委員会第1回選定図書名、④岩波書店御寄贈書、⑤第二書房御寄贈書）掲載されていることが認められた。この⑤「第二書房御寄贈書」の掲載記事により、岩波書店からの寄贈があった同時期に「第二書房」からも6冊の寄贈書が届いていたことが新たに判明した（図表5）。

図表5 第二書房の寄贈書一覧

書名	著者名	刊行年
貞明皇后御歌謹解	佐佐木信綱	昭和26年
夜や秋や日記	吉田絃二郎	昭和24年
歌集 仰日	伊藤保	昭和26年
現代短歌の話：短歌の基本問題（短歌選書）	松村英一	昭和26年
短歌入門ノオト（短歌選書）	佐藤佐太郎	昭和26年
俳句の解釈と鑑賞	俳句学会編	昭和25年

出典：本間一夫 編（1953）『点訳通信26報』日本点字図書館、国立国会図書館オンラインで照合し、筆者が作表した。

2. 「点訳書選定委員会」の発足

昭和27（1952）年12月19日、日本点字図書館第1回点訳書選定委員会が開催された。日本出版協会の鈴木剛男、日本図書館協会の弥吉光長、国立国会図書館の山崎武雄、国立盲学校の阿佐博、日本点字図書館の本間一夫と加藤善徳らにより、点訳用の図書の選定作業が開始された。出版協会の斡旋による各出版社からの点訳用活字書寄贈の道が拓かれたのである。

第1回選定委員会の詳細な記録は、昭和28年1月に発行した「点訳通信26報」に掲載されている（本間1953）。この紙面には、これまでの経緯とともに選定委員会委員が紹介された。

点訳書選定委員会は、①昭和27（1952）年12月19日に第1回会合を開催し正式に発足したこと、②毎月の第4金曜日を定例日としたこと、③すでに2回の会合をもったこと、④選定方針の大綱も決まり、第1回分を発表出来る運びとなったことが記された。

選定委員会委員は、全国出版協会常務理事の宮本信太郎と文化部長の橘経雄、日本出版協会企画調査部長の鈴木剛男、日本図書館協会理事の弥吉光長、国立国会図書館の一般考査部長の阪谷俊作と一般考査部一般連絡調整課長の斎藤毅と受入整理部分類課長補佐兼分類第二係長の山崎武雄、教育大学雑司ヶ谷分校（盲学校）教諭の阿佐博、そして、日本点字図書館常務理事の本間一夫と、理事の加藤善徳がその任に当たった。

本間は、「点訳書選定委員会と出版界の協力」について、昭和29年7月発行の「点訳通信35報」にも詳細を報じている。

①点訳書選定委員会は一昨年12月以来1カ月おきに継続して開催されていること、②定例日は第4金曜日の午後2時から5時過ぎまで開催していること、③正式委員は7名で、本館から本間常務理事と加藤理事が出席していること。さらに、日本出版協会企画調査課長の鈴木剛男、国

会図書館支部図書館部考査奉仕課長の山崎武雄、日本図書館協会常務理事の弥吉光長、東京教育大学付属盲学校教諭の阿佐博の4名が、「お忙しい仕事をお持ちであるにもかかわらず、その都度必ず出席下さいます」と特筆している。

また、図書選定の方法は、選定委員会の開催日に合わせて、①図書館協会、児童福祉審議会、NHKの三社の選定図書等を成人向き・児童向きに分けて、あらかじめ80冊程度のリストを加藤理事が作り、②これを選定委員に事前配布を行い、③選定委員がそれを持ち寄る手順を踏んでいた。選定委員会の席上では、④各委員が良書としてつけた印の数を計算し、直ちにその点数を発表して候補書を選出している。⑤各委員は、良書悪書にかかわらず点訳書として特に問題のある書物について意見が詳しく述べられ、⑥最終的に承認された候補書を本決まりとしていた。また、⑦決定された数十冊の選定書は、直ちに出版社別に分類整理してリストを作り、⑧寄贈依頼先にあてて郵送する段取りとなる。

その際、既に寄贈を受けたことのある出版社には、日本出版協会・全国出版協会からの推薦状とともに、以前に寄贈された書物の点訳経過の報告書を添えて寄贈依頼書を郵送している。依頼状を発送して数日経つと、出版社から真新しい図書が次々と郵送されてきた。

一方、初めての寄贈依頼先となる出版社には、本間常務と職員一名が訪問、挨拶を兼ねて趣旨を詳しく説明した。一日に7~10カ所回る本間らは、訪問先の責任者が例外なく「点字の世界の特殊性をよく理解し、極めて丁寧に対応されるばかりでなく激励までしてもらい」、第1回分の寄贈書を手に、感謝に満ちて帰館していた。⑨こうして集められた図書には、直ちに「日本点字図書館点訳書選定委員会選定書」の印が押され、⑩点訳の申し出のあった点訳者のもとに送られた。

そこで、本間が特筆した岩波書店の呼びかけによる出版社の協力実態を明らかにするため、点字図書館の保存資料を調査した結果を踏まえて、次に述べる。

3. 岩波書店の呼びかけによる「点訳用図書選定書」調査

本間が自著『指と耳で読む』で述懐した日本点字図書館と「岩波書店、文藝春秋社、新潮社、中央公論社、講談社など」の出版社との協働を明らかにするため、筆者は、日本点字図書館本間記念室に保管されていた保存資料「保存箱No.4：墨字原本寄贈」（2013年11月1日、図書製作部点字製作課点訳書製作室）を研究対象とし、岩波書店の呼びかけによる「点訳用図書選定書」調査を実施した。

調査の結果、「点訳用図書選定委員会」が決定した選定書を日本出版協会と全国出版協会に宛ててに発送していた史実が判明した。すでに知られていた出版社名「岩波書店、文藝春秋社、新潮社、中央公論社、講談社」の他に、講談社等の「等」の一字に表された出版社名が明らかになった。

日本点字図書館が日本出版協会と全国出版協会に宛てた第1回~第9回の「点訳用図書選定書」に記録された出版社別に整理した結果を以下に報告する（図表6~14）。なお、保存資料「点訳用図書選定書」は手書きであり、カーボン紙による写しのため、一部は判読が困難であっ

た。本稿では、書籍の出典を確認するため『岩波書店70年』や国立国会図書館検索システムを活用して照合できた書籍の出典情報を踏まえて作表した。

図表6-1 「第1回 点訳用図書選定書」(計9社、22冊)

全国出版協会関係：出版社別の著者名及び書名(昭和28年1月23日付)

出版社別	内訳(著者名及び書名)
新潮社	アルベール・カミュ『異邦人・ペスト』、升山道夫『人類に進歩に：シュワイツァー伝』、年間文集編集委員会『年間少年少女詩集1952年』『年間少年少女作文集1952年』、エーリヒ・ケストナー『少年探偵団』、尾崎一雄『虫のいろいろ』
牧書店	滑川道夫編『読書指導の実践』、阪本一郎『読書相談』
光文社	与田準一『五十一番目のザボン』、宮本忍『思春期』
実業之日本社	宮津博他『世界名作学校劇集：五、六年用』『世界名作学校劇集：中学用』
講談社	武田泰淳『風媒花』、関敬吾『空へのぼったおけやさん』、坪田譲二『おむすびころりん』、グリム『おおかみと七ひきのこやぎ』、
中央公論社	L. ティザード『満ち足りた結婚』、アレクサンダー『ちびのムックの時間です(ともだちシリーズ3)』、坪井栄『坂道』
三笠書房	ヘルマン・ヘッセ『悉達多』
文藝春秋新社	アンネ・フランク『光ほのかに』
福村書店	湊正雄『湖の一生』

図表6-2 「第1回 点訳用図書選定書」(計20社、28冊)

日本出版協会関係：出版社別の著者名及び書名(昭和28年1月23日付)

出版社別	内訳(著者名、書名)
作品社	ロマン・ロラン『人間トルストイ』
黎明書房	日本読書新聞編『私の読書遍歴』
要書房	岸田国土『演劇入門』
創元社	安藤鶴夫『落語鑑賞』、大岡昇平『俘虜記』
ダヴィット社	パール・バック『母の肖像』
角川書店	矢内原忠雄『キリスト教入門』
河出書房	武者小路実篤『馬鹿一』、野間宏『真空地帯』
教文館	イルマン・エフリングフォルト『イエス・キリストの一生』
桜井書店	児童文学者協会編『日本児童文学選 第四集』
筑摩書房	黒田乙吉『北水洋の探検』
学童社	下田湖水『少年の為の次郎物語』
日本放送出版協会	日本放送協会編『光を掲げた人々』
偕成社	沢田謙『御木本幸吉』『福沢諭吉』『湯本秀樹』『ノーベル』『リンカーン』、多田祐計『夏目漱石』

出版社別	内訳 (著者名、書名)
吾妻書房	きだみのる『気違い部落周遊紀行』
改造社	横光利一『旅愁』
新日本文学会	佐多稲子『私の東京地図』
岩波書店	中谷宇吉郎『冬の華』
雄鶏社	宮城道雄『古巣の梅』
朝日新聞社	中島健蔵『読書』、笠信太郎『西洋と日本』、鳥居龍蔵『ある老学徒の手記』

図表7-1 「第2回 点訳用図書選定書」(計9社、19冊)

全国出版協会関係：出版社別の著者名及び書名

出版社別	内訳 (著者名、書名)
牧書店	波多野完治編『十人の発明発見』
福村書店	谷広『平家物語』
光文社	日本文芸家協会編『少年文学代表選集3.』
中央公論社	志賀直哉『山鳩』、宇野浩二『思ひ川』、吉屋信子『鬼火』、尾崎一雄『なめくぢ横丁』、林芙美子『漣波』、阿部知二『砂丘』、島崎静子『藤村の思ひ出』、高村光太郎『典型』、佐藤春夫『新訳水滸伝』
文藝春秋社	楠谷繁雄『新しいパリ、新しいフランス』、H.トレイシー『カケモノ：占領日本の裏表』
新潮社	石川達三『泥にまみれて』
主婦之友社	竹内てるよ『いのる新し』
宝文館	水木洋子『ひめゆりの塔』、笹沢美明『現代詩の歩み』
三笠書房	ヘミングウェイ『武器よさらば』

図表7-2 「第2回 点訳用図書選定書」(計11社、23冊)

日本出版協会関係：出版社別の著者名及び書名

出版社別	内訳 (著者名、書名)
岩波書店	ロフティング『ドリトル先生の郵便局』、K.チャベック『長い長いお医者さんの話』、ヴァン・ルーン『人間の歴史の物語 上』、シュテファン・ツワイク『マリー・アントワネット』
毎日新聞社	古谷網武編『日本名作物語』、山室静編『世界名作物語』、和達清夫・中野猿人『やさしい天文学』、伊藤整編『日本の文学』、中野好夫編『世界の文学』、毎日新聞社編『日本の名著』『世界の名著』
要書房	戸塚文子『日本の旅』
ハト書房	魯迅『阿Q正伝』
創元社	J.ウィリアムズ『欲望という名の電車』
法政大学出版局	O.ケーラー『日本開眼』
朝日新聞社	村上元三『源義経 一巻』『源義経 二巻』

出版社別	内訳（著者名、書名）
小説朝日社	石川達三『母系家族人生画帳』
磯部書房	鶴飼正男『めざまし学園』、高崎節子『混血児』
金子書房	坪田譲治『坪田譲治童話（三年）』
六興出版社	スタインベック『怒りの葡萄 上』『怒りの葡萄 下』

図表 8-1 「第3回 点訳用図書選定書」(計4社、16冊)

全国出版協会関係：出版社別の著者名及び書名

出版社別	内訳（著者名、書名）
中央公論社	穂積重遠『結婚読本』、桑原武雄『文学と女の生き方』、直井清『溯』、芹沢光治良『ヨーロッパの表情』
文藝春秋社	水原秋桜子『高浜虚子』、クリストファ・イシャウッド『救いなき人々』
新潮社	阿川弘之『春の城』、ジェームズ・ヒルトン『チップス先生さようなら』、ブッシー『処女オリヴィア』、カフカ・フランツ『変身』、モロア・アンドレ『宿命の血』
三笠書房	コフマン『世界人類史物語』、桑原武夫『近代文学入門』、内田百閒『阿房判事』、正宗白鳥『読書雑記』、ハーディ・トマス『帰郷』

図表 8-2 「第3回 点訳用図書選定書」(計28社、50冊)

日本出版協会関係：出版社別の著者名及び書名

出版社別	内訳（著者名、書名）
至文堂	金森徳次郎 等『本は如何に読むべきか』、辻莊一『音楽の歴史と聴き方』
近藤書店	南原繁『学問、教養、信仰』
細川書店	谷川徹三『ヒューマニズム』
小山書店	出隆『哲学以前』
青峯書房	高橋巳寿衛『ノーベル賞に輝く人々』
新教出版社	大島正健『クラーク先生とその弟子たち』
社会教育協会	穂積重遠『私たちの民法』
書林新甲鳥	中谷宇吉郎『立春の卵』
筑摩書房	矢島祐利『世界の科学者』、山浦篤『花の世界』、長谷川四郎『シベリヤ物語』、宮城音弥『新しい感覚』
東京出版	ジャック・ドラマン『小鳥のよるひる』
出版東京	ゲルトルート・グローテ『大芸術家の恋愛書簡』
人文書院	田辺尚雄『名曲詳解』
協立書店	門馬直衛『大音楽家物語』
創元社	G.デュアメル『慰めの音楽』、林語堂『生活の発見』

出版社別	内訳 (著者名、書名)
岩波書店	W.S. モーム『読書案内：世界文学』、井上正蔵『ハインリヒ、ハイネ』
磯部書房	佐山済『新しい日本文学史』
未来社	安部公房『闖入者』
暮しの手帖社	田宮虎彦『足摺岬』、滝澤敬一『ベッドでのむ牛乳入り珈琲』
蒼樹社	徳永直『静かなる山々』
朝日新聞社	長与善郎『その夜』、三島由紀夫『アポロの杯』
河出書房	福田清人『国木田独歩の生涯』、ドライサー・セオドア『とりで』、バルザック『従妹ベット』
月曜書房	老舎『四世同堂』
日本出版共同	郭沫若『訪ソ紀行』
毎日新聞社	パールバック『神の人々』

図表9-1 「第4回 点訳用図書選定書」(計6社、16冊)

全国出版協会関係：出版社別の著者名及び書名(昭和28年6月26日付)

出版社別	内訳 (著者名、書名)
三笠書房	サバチニ『スカラムーシュ』、プルウスト『愉しみと日々』、有島武郎『星座』、斉藤磯雄訳『ボードレエル詩集』、モンゴメリ『赤毛のアン』
新潮社	モンサラット『怒りの海上』『怒りの海下』、ツヴァイク『哀愁のモンテカルロ』、田山花袋『妻』、モーパッサン『ピエールとジャン』
ポプラ社	中西悟堂『昆虫界のふしぎ』
宝文館	笹沢美明『中学生の伝記 ゲーテ』、竹内てるよ『バラサン岬の少年たち』
中央公論社	大佛次郎『父をたずねて』、ケストナー『五月三十五日』
実業之日本社	ファーズ・ソファイア『天と地のはじまり』

図表9-2 「第4回 点訳用図書選定書」(計20社、45冊)

日本出版協会関係：出版社別の著者名及び書名(昭和28年6月26日付)

出版社別	内訳 (著者名、書名)
朝日新聞社	徳川無声『問答有甲 I』『問答有甲 II』、プリーストリー『自由な考え方』、半沢朔一郎『新しい科学』、キャサリン・オウンズ・ベア『ベッスン物語：黒人の母』、林寿郎『アフリカの猛獣狩』
岩崎書店	美濃部良吉『日本の経済』
黄土社書店	大森義太郎『唯物弁証法読本』
三啓社	前田純敬『練尾布由子』
池田書店	尾崎一雄『芳兵衛物語』
国土社	松居桃楼『蟻の街の奇跡』

出版社別	内訳（著者名、書名）
岩波書店	モラティン『娘たちの「はい」』、小林多喜二『蟹工船』、モリエール『人間嫌ひ』、アーヴィング『スケッチブック』、末広恭雄『魚の生活』、J.C.ハリス『ウサギどん キツネどん』、ベルゲングリユー『ツイゼルちゃん』、オケリー他編『カッパのクー：アイルランド伝説集』、金田鬼一訳『グリム童話』、サッカレイ『バラとゆびわ』、デ・ラ・メア『サル王子の冒険』、M.M.ドッジ『ハンス・プリンカー』、レアンダー『ふしぎなオルガン』
創元社	高田保『ブラリひょうたん』
白水社	モーリヤック『愛の砂漠』
月曜書房	ルーマー・ゴッデン『黒水仙』
河出書房	ドーデー『月曜物語』
富士出版	永田義夫『微生物の話』
東洋書館	ホーソン『六人の偉人物語』、秋田雨雀『一郎とにぎりめし』
偕成社	露木陽子『ジュナン：赤十字の父』
金の星社	坪田譲治『日本むかしばなし』
泰光堂	与田準一『かあさんおめでとう』
羽田書店	上沢謙二『盲の大臣』
あかね書房	大蔵宏三編『お母さんの童話』、高橋健二『ハウフどうわ』、山室静『うみの女王』、永井明『ガンジー』、児童文学者協会『キューリー夫人』
筑摩書房	大町文衛『よしきりものがたり』、鈴木三重吉『世界おとぎばなし』、豊島与志雄『海の灯山の灯』、山内義雄『モンテクリスト』
法政大学出版部	オルコット『若草物語』（第三部）

図表 10 - 1 「第 5 回 点訳用図書選定書」（計 9 社、33 冊）

全国出版協会関係：出版社別の著者名及び書名（昭和 28 年 8 月 28 日付）

出版社別	内訳（著者名、書名）
三笠書房	古谷綱武『幸福への道』、ヴィッキイ・パウム『ガラスの城』、川端康成『再婚者』
中央公論社	長谷川良夫『作曲のよろこび』、高村光太郎『みちのくの手紙』、アレクサンダー『グスターフの冒険』、ルネ・ギヨ『象の王子』、打木村治『生きている山脈 上』打木村治『生きている山脈 下』
東洋経済新報社	村岡花子『生活の流れに棹さして』
乾元社	徳田秋声『仮装人物』
文藝春秋社	福原鱗太郎『われ愚人を愛す』
講談社	上沢謙二『幼児に聞かせるお話集』、北川千代編『おやゆびひめ』、久米元一編『船乗りシンドバッド』、岸なみ編『せむしの子馬』、水谷まさる編『イワンの馬鹿』、大田黒克彦編『魔法のつえ』、久米元一編『三つのたから』、鹿島鳴秋編『魔法のなしの木』、桑野福次編『星姫ものがたり』、西山敏夫編『ジャックと豆の木』

出版社別	内訳 (著者名、書名)
宝文館	菊田一夫『さくらんぼ大将 一』『さくらんぼ大将 二』『さくらんぼ大将 三』
ポプラ社	佐藤紅緑『ああ玉杯に花うけて』、吉屋信子『紅雀』『あの道この道』、菊池寛『心の王冠』、加藤武雄『君よ知るや菊の国』、芹沢光治良『美しき旅路』
主婦之友社	バランタイン『無人島の三十年』、施耐庵『水滸伝』

図表 10 - 2 「第5回 点訳用図書選定書」(計 21 社、37 冊)

日本出版協会関係：出版社別の著者名及び書名 (昭和 28 年 8 月 28 日付)

出版社別	内訳 (著者名、書名)
白水社	アンリ・カルヴェ『ナポレオン』
三一書房	郭沫若『日本国民に訴える』
岩波書店	具島兼三郎『激変するアジア』、ベラミー『顧みれば』、野上弥生子『若き姉妹よ いかにも生くべきか』、南原繁『人間と政治』、V.M. ヒルヤー『世界をまわろう』
アヅミ書房	有賀久雄『誰にも分かる遺伝の話』
毎日新聞社	伏見康治編『原子力と文明』、今日出海『怒れ三平』、毎日新聞社編『日本文化を築いた十偉人』、横山美智子『山鳴り』
筑摩書房	平井昌夫『演説』、埴英夫『背教徒』、関村つる子『トルストイ童話集』、浅井眞男『原始林のドクトル』
創元社	暉峻康孝『西鶴』
朝日新聞社	丹羽文雄『蛇と鳩』、在華同胞帰国協力会他編『新しい中国』、
小説朝日社	芹沢光治良『新しいパリ』、中山義秀『朝雲暮雲』
新評論社	パール・バック『黙ってはいられない』
国民文化社	杉本清治『やさしい結婚の生理』
大蔵省印刷局	壺井栄『あしたの風』
河出書房	伊藤整『伊藤整氏の生活と意見』
要書房	串田孫一『美しき生の発見』
社会思想研究会出版部	谷川徹三『平和の哲学』
勁草書房	安倍能成『リベラリストの言葉』
小峰書店	偉人伝研究会編『世界偉人伝百選』
岩崎書店	中川逢吉『植物の生き方』
日本童話会	日本童話会編『小鳥の家』
あかね書房	松村武雄・鈴木三重吉『かちかち山』『かぐやひめ』『いっすんぼうし』、巖谷小波『きのこのきのすけ』『ゆめのくに』
妙義出版社	富田邦彦『永井隆博士』

図表 11-1 「第6回 点訳用図書選定書」(計7社、15冊)

全国出版協会関係：出版社別の著者名及び書名(昭和28年12月3日付)

出版社別	内訳(著者名、書名)
ポプラ社	松本恵子『ヘレン・ケラー』
文藝春秋社	安部真之助『近代政治家評伝』、久米正雄『微笑随筆』
三笠書房	リットン『ポンペイ最後の日』、ヘルマン・ヘッセ『湖畔の家』
新潮社	アルベール・カミュ『正義の人々』、プルースト『花咲く乙女たち』
宝文館	冨塚清『中学生のための科学者列伝』
主婦之友社	クライスト『荒野の狼』、スーサン・クーリッジ『ケティー物語』、 ホーマー『オデッセイ物語』
誠文堂新光社	永井鱗太郎『あかいおりづる』、くぼたひろし『みんなで劇を』『虹 のあるまど』、正善達三『劇を書く子供』

図表 11-2 「第6回 点訳用図書選定書」(計18社、28冊)

日本出版協会関係：出版社別の著者名及び書名(昭和28年12月3日付)

出版社別	内訳(著者名、書名)
岩波書店	クセノフォン『ソークラテースの思い出』、カッシーラー『人間： この象徴を操るもの』、ミルトン『言論の自由』、スウィフト『桶物 語』
創文社	柳田謙十郎『日本の良心はいかにあるべきか』
ダヴィッド社	ブドウ・スワニーゼ『叔父スターリン』
筑摩書房	宮本常一『日本の村』、郭沫若『亡命十年』
要書房	荒垣秀雄『世相の風土』
朝日新聞社	広岡知男『時事経済の知識、朝日常識講座』、田中慎次郎『原子力 と社会』
六興出版社	婦人朝日編『娘の作文』
河出書房	蔵原権人『小林田壺二と宮本百合子』、松岡譲『夏目漱石』
未来社	野間宏『人生の探求』
潮書房	レマルク『生命の花』
タトル商会	ヘミングウェイ『老人と海』
早川書房	セオドア・ドライサー『黄昏』
みすず書房	シュワイツェル『永遠のゲート』
白水社	カロッサ『美しき惑いの手』、ゼーガース『死者はいつまでも若い』
社会思想研究会編集部	ジュリアン・ハクスリー『蟻の生活』
日本書房	中正夫『ライト兄弟 飛行機発明物語』、福田治三郎『フォード 自動車発明物語』
鶴書房	日本作文の会『良い作文の書き方 1年生』『良い作文の書き方 2 年・3年4年生』、浜田広介『新しい童話 1年・2年生』
あかね書房	斉田喬『ほくらの学芸会：学校劇脚本集』

図表 12-1 「第7回 点訳用図書選定書」(計7社、13冊)

全国出版協会関係：出版社別の著者名及び書名(昭和29年2月26日付)

出版社別	内訳(著者名、書名)
三笠書房	尾崎一雄『小鳥の声』
牧書店	辰巳敏夫『性格の心理』、三宅泰雄『海のなぞ』、波多野完治『十人の発明発見』
宝文館	北條秀司『ラジオ・ドラマ選集』
新潮社	川端康成『掌の小説百篇 上』『掌の小説百篇 下』(新潮文庫)、グリーン・グレアム『愛の終わり』、坂西志保『住みよい社会をつくる人たち』
実業之日本社	実業之日本社編『日本の扉を開いた人々』
福村書店	藤原与一『ことばの歴史』
中央公論社	岡田章雄『乗物の歴史』、ヴィルドラック『小山羊のアマドー』

図表 12-2 「第7回 点訳用図書選定書」(計25社、65冊)

日本出版協会関係：出版社別の著者名及び書名(昭和29年2月26日付)

出版社別	内訳(著者名、書名)
筑摩書房	日本放送協会『趣味の手帖』、奥野信太郎『柘榴の庭』、宮本顕治『十二年の手紙』、老舎『ちやお・つうゆえ』、田中秀央『ギリシャ神話』、中屋健一『二十世紀の世界』、柳田國男『なぞとことわざ』、古賀忠道『動物園』
有斐閣	岩崎武雄『西洋哲学史』
岩波書店	パーネット『プラトン哲学』、ヘーゲル『哲学入門』、島崎敏樹『感情の世界』、野上弥生子『迷路 第一部』、『迷路 第二部』、『迷路 第三部』、『迷路 第四部』、コールドウェル『タバコ・ロード』、(村の図書室) シリーズ=川田信一郎・渡辺成美『米の増産』、若月俊一『健康な村』、浪江虔『村の政治』、御園喜博『市場：野菜・果物』、清水幾太郎『人生案内』、大谷省三『国土の改造：われわれは豊かになれるか』、弘法健三・山崎不二夫『水田と畑』、都留重人等『日本の進路』
春秋社	鶴見和子編『デュニー研究』
青木書店	キェルケゴール『死にいたる病』、徳永直『私の人生論』
毎日新聞社	南博編『人間の心理』、箭内健次編『日本史』、片岡良一『近代文学の読み方』
創元社	フロム・エーリッヒ『夢の精神分析』、金子光晴『詩集 人間の悲劇』
みすず書房	ツヴァイク・シュテファン『フロイド』
白水社	ルネ・ビノア『応用心理学』、ジャック・フェルナン・カーン『アメリカ文学史』、ルネ・ラルー『英文学史』
東京大学出版会	佐藤俊夫『倫理学』、原佑『論理学』
河出書房	中川善之助『「女大学」批判』、ジェイムズ・ジョイス『ダブリン市民』

出版社別	内訳（著者名、書名）
弘文堂	鈴木大拙『宗教入門』
至文堂	三好達治『詩を読む人のために』
京都 三一書房	深尾須磨子『深尾須磨子詩集』
青銅社	國分一太郎『村の少年期』、丁玲『文学と生活』
ハト書房	島田正雄『中国新文学入門』
未来社	郭沫若『屈原』
法政大学出版局	福原麟太郎『英文学の周辺』
六興出版社	ジョン・スタインベック『月は沈みぬ』
ダヴィット社	デュ・モオリア『真実の山』
岩崎書店	イリン『ルネッサンス』『自然の征服』
あかね書房	北村一夫『植物のくらし』、水上勉『世界の文豪』、小川未明『太陽と星の下』
小峯工業出版	八十島義之助『鉄道の歴史』
大阪むさし書房	大阪中央放送局学校劇研究会編『学校劇集』
三十書房	坪田譲二『むかしばなし三年生』

※第8回と第9回は、全国出版協会関係と日本出版協力関係の別がなくなっていた。

図表 13 「第8回 点訳用図書選定書」（計 27 社、71 冊）

（昭和 29 年 7 月 2 日付）

出版社別	内訳（著者名、書名）
毎日新聞社	鈴木大拙『宗教』
岩波書店	マルティン・ルター『現世の主権について 他二篇』、斉藤茂吉『歌集 つきかげ』、コロレンコ『盲音楽師』、H.リュイス『とぶ船』、金素雲編『ネギをうえた人』、大畑末吉『アンデルセン童話選 上』、E.ターシス『村に学校ができた』、アイネス・ホーガン『まいごのふたご』、M.フラック『おかあさんだいすき』、バージニア・パートン『ちいさいおうち』、エレーン・ポガニー『金のニワトリ』
日本評論新社	ジャワハルラル・ネール『父が子に語る世界歴史』
朝日新聞社	ジョン・ハント『エヴェレスト登頂』、クーゲルマス『平和の闘士ラルフ・バンチ博士』
新潮社	古谷綱武『妻の生き方』、アンドレ・マルロオ『希望 上』『希望下』、阿川弘之『魔の遺産』、坂口禰子『蕃地』、マルセル・プルースト『失われた時を求めて』、アンドレ・モロア『フランス史』
講談社	高群逸枝『女性の歴史』、日本放送協会『ことばの研究室』、安部知二『人工庭園』、石坂洋二郎『母の自画像 上』『母の自画像 中』『母の自画像 下』、井上靖『異域の人』、ケストナー『飛ぶ教室』

出版社別	内訳 (著者名、書名)
読売新聞社	読売新聞社『ついに太陽をとらえた』
二宮書店	瀬木三雄『妊娠から出産まで』
河出書房	武藤辰男編『美しい国語・正しい国字』、亀井勝一郎『恋愛・自然・人生』、河盛好蔵『幸福の探求』、エレンブルグ『嵐 上』『嵐 下』、関敬吾等編『世界民話全集 1. 南欧篇』『世界民話全集 2. 北欧篇』
弘文堂	久松潜一『日本文学史 上』『日本文学史 下』
厚文社	小田切秀雄『近代日本の作家たち』『続 近代日本の作家たち』
筑摩書房	田宮虎彦『卯の花くたし』、鳥生芳夫『本のはなし』、木下順二『私たちのシェクスピア』
中央公論社	伊藤整『女性に関する十二章』、芹沢光治良『一つの世界』
ダヴィット社	レベッカ・ウエスト『考える葦 上』『考える葦 下』
文藝春秋社	徳川無声『お茶漬哲学』
光文社	清水幾太郎他編『基地の子』、壺井栄『二十四の瞳』、北島八穂『あぐたれ童子ポコ』
三十書房	前川康男『こころの教室 一年生』『こころの教室 六年生』
牧書店	別枝達夫『西洋の歴史 上』、菅井準一『人類のともしび：ノーベル賞に輝く人々』
光の友社	日本放送協会『光を掲げた人々 2』『光を掲げた人々 3』
金子書房	坂西志保『リンカーン』、酒井朝彦『ナイチンゲール』
同和春秋社	福田清人『現代小説の読み方』、池田亀鑑『清少納言物語』、トルストイ『少年漂流記』
アルス	箕作秋吉他編『世界音楽物語』
泰光堂	与田準一『おかあさんおめでとう』
ポプラ社	久保田万太郎他編『歌舞伎教室』
金の星社	小川未明他 監修『偉人物語 美しい話 五年生』『偉人物語 美しい話 六年生』
偕成社	浅井治平『日本旅行』
法政大学出版局	ホワイト『こぶたとくも』

図表 14 「第9回 点訳用図書選定書」(計 38 社、84 冊)

(昭和 29 年 10 月 1 日付)

出版社別	内訳 (著者名、書名)
青木書店	山崎謙『矛盾の論理学：矛盾論の解明』
弘文堂	暁烏敏『絶対他力』
ダヴィッド社	アルベール・テイボーデ『フランス文学史 上』『フランス文学史 下』
白水社	ボン・パール『実験漂流記』、ピエール・メイル『インド史』

出版社別	内訳（著者名、書名）
日本文化科学社	田中寛一『ペスタロッチ』
牧書店	櫃田祐也『音のない世界』、野呂信太郎『世界の音楽家』
高陽書院	尾谷あい子『癌と闘う』
岩崎書店	宮良当壮『風土と言葉』
要書房	横山美智子『女性手紙の書き方』
未来社	アントノーワ『短篇小説作法』、寺田透『現代日本作家研究』
河出書房	ショーロホフ『世界文学全集：ショーロホフ』、河盛好蔵『愛・自由・幸福』
三一書房	日本現代文学史研究会編『日本の現代文学史』
創元社	石田波郷『定本石田波郷全句集』、亀井勝一郎『智識人の肖像』、松村武雄他訳『世界少年少女文学全集 東洋篇1（東洋童話集）』
朝日新聞社	富倉徳次郎校註『平家物語 上』『平家物語 下』
光文社	壺井栄『岸うつ波』
角川書店	武者小路実篤『花は満開』、山本有三『西郷と大久保 他二篇』
講談社	大田洋子『半人間』、金田一京助編『こがねのくびかざり』（世界名作童話全集 48、アイヌ昔話）、アラビアンナイト『魔法のりんご』、P. ミュッセ『世界名作童話全集 風の神と雨の神』
作品社	有馬頼義『終身未決因』
新潮社	井上靖『あすなる物語』、石坂洋二郎『美しい暦』『何処へ』、阿川弘之『魔の遺産』、ウィーダ『フランダースの犬』、坪田譲治『少年の目』、住井すゑ『夜あけ朝あけ』
東方社	堤千代『れい子の道』
六興出版社	吉川英治『平将門』
三笠書房	ウイリアム・フォクナー『響きと怒り 他五篇』
メヂカルフレンド社	板垣直子『婦人作家評伝』
筑摩書房	川端康成『山の音 普及版』、岡田章雄『日本史ものがたり 上』『日本史ものがたり 下』
日本出版協同	V. ユーゴ『ノートルダムの傀儡男』
音楽之友社	ディームズ・テイラー『音楽の上手な聴き方』、服部竜太郎『音楽をたずねて』
日本評論新社	ジャワハルラル・ネルー『父が子に語る世界歴史（3）』『父が子に語る世界歴史（4）』
光の友社	日本放送協会編『光を掲げた人々（4）』
偕成社	肥後和男『物語日本歴史』、高木卓『ニーベルンゲン物語』、浅野晃『源頼朝』
人文書院	サルトル『自由への道』
毎日新聞社	小西四郎他編『日本の文化につくした外国人』、毎日新聞社図書編集部編『世界めぐり』

出版社別	内訳 (著者名、書名)
同和春秋社	那須辰造『外国文学の読み方』、アミーチス『世界名作童話 母をたずねて』、ロシア童話／梅田寛訳『ネコを売ったイワン』、クプリーン『白いむく犬』、大木惇夫『ふしぎな櫻ん坊』
金の星社	坪田譲治『森の中の塔』
中央公論社	伊東三郎『コトバの歴史』、オルコット『木陰の家 上』『木陰の家 下』、ポーター『喜びの本 上』『喜びの本 下』
岩波書店	桑原万寿太郎『ミツバチの世界』、アンデルセン、ペロー『ナマリの兵隊、長ぐつをはいたネコ』、エクトル・マロ『家なき子 上』『家なき子 中』『家なき子 下』、ノーソフ『ヴィーチャと学校友だち』、ピアンキ『小ネズミのピーク』、A.ムストフ『こぐま星座 上』『こぐま星座 下』、A.ホワイト『埋もれた世界』
日本書房	浜田広介『ひろい世界』
三十書房	小泉八雲『ちんちん小袴』、芥川龍之介・佐藤春夫『蜘蛛の糸・りんごのお花』(日本童話名作選集)、巖谷小波『ひつじ太鼓』
わらび書房	国分一太郎『すこし昔のはなし』(少年小説集)
金子書房	林蘂『パプロフ』
河出書房	イリン『自然と人間の物語』
金の星社	与田準一『どうぶつむら』

以上の結果、①点訳用図書選定委員会が決定した選定書は、昭和28年1月23日付～昭和29年10月1日付の書面をもって9回発送されていたこと、また、②選定書を刊行した出版社はのべ258社であったこと、③選定書数は合計565冊であったことが判明した。なお、選定書を刊行した出版社からは、その後、寄贈を受けることになる(図表15)。

図表 15 「点訳用図書選定委員会」が決定した選書数一覧

	選定書の送付年月日	選書数(冊)	出版社数(社)
第1回	昭和28年(1953)1月23日付	50	28
第2回	(日付不明)	42	20
第3回	(日付不明)	66	32
第4回	昭和28年(1953)6月26日付	61	26
第5回	昭和28年(1953)8月28日付	70	30
第6回	昭和28年(1953)12月3日付	43	25
第7回	昭和29年(1954)2月26日付	78	32
第8回	昭和29年(1954)7月2日付	71	27
第9回	昭和29年(1954)10月1日付	84	38
	合計	565	258

岩波書店からの呼びかけに対して刊行本寄贈に賛同し協力してくれることになった出版社は109社であったことから、これまで「岩波書店、文藝春秋社、新潮社、中央公論社、講談社等」の「等」一文字で表されてきた「出版社」は104社であることが判明した。

今般、館内で発見された日本点字図書館所蔵の保存資料「保存箱 No.4：墨字原本寄贈」を調査した結果、昭和27年（1952）年12月19日に開催された第1回点訳書選定委員会で決定された選書は、昭和28年（1953）1月23日付の書面をもって全国出版協会と日本出版協会宛に送付していたことが明らかとなった。本間は、当時の図書館の近況を『点訳通信点字版 第17信 昭和28年10月末』（本間1999：35）において「出版社からの点訳用活字書の寄贈です。これも一か月おきに開かれている点訳書選定委員会のご努力もあって、各出版社ともお願いをいれておられます。この頃こちらから皆様にお送りする活字書は、すべてそうしていただいたものです」と伝えていることから、第2回目以降の点訳書選定委員会も、書面の送付日の一か月前には開催されていたことが推察された。

「点訳書選定委員会」に関連する史実は、これまで『日本点字図書館50年史』による記録、すなわち、①「(昭和27年)12月19日、第1回点訳書選定委員会開催。日本出版協会・鈴木剛男、日本図書館協会・弥吉光長、国立国会図書館・山崎武雄、国立盲学校・阿佐博、当館・本間一夫、加藤善徳ら。出版協会の斡旋により各出版社から点訳用活字書寄贈の途、開かれる」、②(昭和28年)11月の事項の下に「1月より5回開催、315冊選定。活字書は出版社より寄贈。著訳者への挨拶状送付等、相当数の厚意ある返信を受ける。」との記載によって把握されてきた。今般の調査の結果、この記載に関連する諸事象が判明し新たな史実が浮かび上がってきた。今後、さらなる検証精査が必要である。

おわりに

令和元年6月21日、衆議院本会議において「読書バリアフリー法（正式名称：視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する法律）」が全会一致で可決成立した。この法律は、視覚障害者等（＝視覚障害、発達障害、肢体不自由等の障害により、書籍について、視覚による表現の認識が困難な者）の読書環境の整備を総合的かつ計画的に推進し、障害の有無にかかわらず全ての国民が等しく読書を通じて文字・活字文化の恵沢を享受することができる社会の実現に寄与することが目的である。本を「買う権利」や「借りる権利」を確立する上での「大きな礎」となることが期待されている。すでに、視覚障害者の「指と耳で読む読書」を具現してきた日本点字図書館は、出版社との協力関係を構築し、時代の要請に答えて事業を展開してきた。本間が創設した日本盲人図書館は、昭和15年11月10日から視覚障害者の読書生活を支えてきた先駆的存在である。

本稿は、戦後昭和23年4月1日に改称し再出発した日本点字図書館の創設者である本間の窮地を救った岩波書店と、岩波書店の呼びかけによる出版社との協働の実態を明らかにしたものである。すなわち、日本点字図書館所蔵の保存資料「保存箱 No.4：墨字原本寄贈」を調査した結果、点訳用選定委員会が選定した選書合計565冊の照会に寄り、全国出版協会及び日本出版協会

関係の合計 109 社から活字本が寄贈されるに至った史実が判明した。

さらにこの資料調査の分析をすすめて、出版社から寄贈書が届いた後に点訳者が点訳し、その点訳書が所蔵されるに至る史実を探り、「日本点字図書館と出版社との協働」の全貌を明らかにすることが今後の課題である。

謝辞

貴重な永久保存資料の閲覧をお許しいただきました日本点字図書館理事長の田中徹二先生はじめ館長の長岡英司先生、また文献照会ならびに諸資料の収集整理にご助言を賜りました本間記念室の伊藤宣真様、濱田幸子様、前館長の小野俊己様に多大なご高配を賜りました。ここに記して深甚なる感謝の意を表します。

注釈

1. 昭和 25 (1950) 年 11 月、創立 10 周年となる頃には、200 余名の点訳奉仕者が誕生し 1,700 冊の点訳書が作成された。日本点字図書館の蔵書数は、昭和 24 年 4,069 冊、昭和 25 年 5,159 冊、昭和 26 年 5,908 冊、昭和 27 年 7,056 冊と増加の一途を辿った (日本点字図書館 50 年史編集委員会 1994 : 234)。
2. 昭和 26 (1951) 年 3 月に社会福祉事業法が制定、「点字図書館」は「第二種社会福祉事業」と規定された。加藤は「民間の社会事業、特に第二種のそれは、大きな犠牲なしには育たない。それに使命を感じた人間が、命がけでそれに一生をかける。伯父さんの小さな生涯も、この図書館に注ぎつくしたつもりだ」(加藤 1975 : 21)、「社会福祉事業には、第一種と第二種とがある。第一種は人間を収容している施設で国から費用が出るが、第二種は利用施設で、自分でまかなわなければならない。伯父さんたちは、今年は 6 千万円も募金しないと、この経営ができないんだよ。命がけさ。」(加藤 1975 : 26) と、来館した甥に述べている。

文献一覧

- 阿佐博 (2012) 『点字の履歴書：点字に関する 12 章』 視覚障害者支援総合センター
- 加藤善徳 (1975) 「目の不自由な人々の読書：点字と録音テープの図書館の話」『青少年問題』 22(6)、21～26 頁
- 小林卯三郎 (2004) 「点字出版史」『世界盲人百科事典』 日本ライトハウス、80～89 頁
- 林薫夫 (2004) 「点字楽譜の出版」『世界盲人百科事典』 日本ライトハウス、89～91 頁
- 緑川亨編 (1987) 『岩波書店 70 年』 岩波書店
- 日本点字図書館編集委員会編 (1994) 『日本点字図書館 50 年史』 日本点字図書館
- 本間一夫 (1951) 「点字の世界：盲人にも文化を与えよ!!」『文藝春秋』 29(2)、187～193 頁
- 本間一夫 (1952) 『点訳通信 23 報』 日本点字図書館
- 本間一夫 (1953) 『点訳通信 26 報』 日本点字図書館
- 本間一夫 (1954) 『点訳通信 35 報』 日本点字図書館
- 本間一夫、緑川亨 (1977) 「日本点字図書館：37 年の歩み」『世界』 381、145～163 頁
- 本間一夫 (1980) 『指と耳で読む：日本点字図書館と私』 (岩波新書 黄版 138) 岩波書店
- 本間一夫 (1999) 「点訳通信点字版 第 17 信」『忘れ残りの通信集：点訳ボランティアの方々へ』 点訳通信点字版、日本点字図書館 (非売品)、33～35 頁
- 関 宏之 (2002) 「2. 身体障害者福祉法の成立」、日本ライトハウス 21 世紀研究会編『わが国の障害者福祉とヘレン・ケラー：自立と社会参加を目指した歩みと展望』 教育出版、50～52 頁
- 谷合侑 (1998) 「第 2 章 第 2 節 身体障害者福祉法と点字図書館」『盲人福祉事業の歴史』、明石書店、78～83 頁